

長編ハード・バイオレンス
書下ろし

家田莊子

悪友

(げろろつき)

NON NOVEL





NON NOVEL

「ノン・ノベル」創刊にあたって

「ノン・ブック」が生まれてから二年一ヵ月、ここに姉妹シリーズ「ノン・ノベル」を世に問います。

「ノン・ブック」は既成の価値に「否定」を発し、人間の明日をささえる新しい喜びを模索するノンフィクションのシリーズです。「ノン・ノベル」もまた、小説を通して、新しい価値を探っていききたい。小説の「おもしろさ」とは、世の動きにつれてつねに変化し、新しく発見されていくものだと思います。

わが「ノン・ノベル」は、この新しい「おもしろさ」発見の営みに全力を傾けます。ぜひ、あなたのご感想、ご批判をお寄せください。

昭和四十八年一月十五日

NON・NOVEL編集部

NON・NOVEL-363

長編ハード・バイオレンス 悪友(ごろつき)

平成3年7月20日 初版第1刷発行
平成4年3月15日 第2刷発行

著者 いえだしょうこ 家田 莊子

発行者 伊賀弘三良

発行所 しょうでんしゃ 祥伝社
〒101 東京都千代田区神田神保町 3-6-5
九段尚学ビル

☎ 03 (3265) 2081 (営業)
☎ 03 (3265) 2080 (編集)

印刷 萩原印刷
製本 明泉堂

128142
¥750

万一、落丁・乱丁がありました場合は、おとりかえます。Printed in Japan.

ISBN4-396-20363-2 C0293

©Shoko Ieda, 1991

長編ハード・バイオレンス

永田莊子 悪友(ごろうき)



NON NOVEL

祥伝社

目 次

1章 極道スカウト

7

2章 グループ・ピィの女

53

3章 専科レッスン

81

4章 ハワイ射撃旅行

111

5章 修業の成果

151

6章 抗争^{せんそう}突入

177

7章 血の報復戦

210

8章 ヒットマン

244

カバー写真・坂本利幸
本文イラスト・新井田 孝
装幀・中原達治

1章 極道スカウト

1

「あの、すいません」

倉科涼は遠慮がちに声をかけた。その視線の先には、一組のカップルがすわっていた。だが、まったく無視された。

「すいませんけど……」

再び涼は、声を掛けた。

その顔はよく見ると、エキゾチックだった。大きな二重の目に大きな口。スタイリンググローションで立たせたスポーツ刈りの頭。長身で、スラリとしていた。一八〇センチ近くはありそうだ。

涼の声はやはり、カップルには届かなかったらし

い。

ここは、六本木のディスコJである。この店内の煩さでは、よっぽど声を張り上げないと人の耳には届きそうもなかった。

「すいませんっ」

涼は、ついに大声を張り上げた。

「ん？」

初めてカップルの男が、まっすぐな眉を歪めながら、煩わしそうに顔を上げた。長髪をポニーテールにしていた。

「なんだよ、お前は」

理知的な顔をしていたが、その切れ長な目は、お楽しみ中を邪魔されたためか挑戦的だった。

「なあに？」

女が、長い髪を掻き上げながら振り返った。自分の姿形と踊りに自信を持っている、目立ちたがり屋のお立ち台ギャルそのものだ。きれいだが、派手なだけで軽そうだった。

「いえ。あの……」

涼は、申し訳なさそうな顔で、

「ここに財布を落としたらしいんです。今、トイレに行つてたもので……。ちよつと席を捜させてください」

と言つた。その目は、黒ブーツの辺りを探つてゐる。

突然、カップルの男の顔に血の気が走つた。

「なんだと。お前、俺が、財布も席も盗つたつて言うのかよ。デイスコじゃな、席を立つた途端に黒服が、新しく来た客をすわらせるんだ。お前の席なんか、もうねえよ」

鼻孔を膨らませながら、威嚇してみせた。

「まいったなあ……」

涼は、頭を掻きながら、つぶやいた。二人とも年の頃は、二十歳ぐらいか。

「何か言つたか」

ポニーテールの男は、お立ち台ギャルの肩に回した手を下ろすと、再び睨みつけた。

「あの……。ちよつと、どいてもらえないでしょう

か。本当に財布を捜すだけなんです」

涼は相手を刺激しないように丁寧な口調で、言つた。

周りの客たちが、興味深げな視線で、三人を眺め始めた。

「てめえ、いい加減にしろよ。人の邪魔した挙句に泥棒扱いだよ。遊びのルール知らねえな」

ポニーテールの男が、侮辱したような、勝ち誇つた表情を浮かべた。

「いやあね。瞳、何とかしてよ」

女が蔑むように涼を見た。

見るからに安物の黒いセーターにGパン、どこにもありそうなスニーカー。服装審査の厳しいこのデイスコに、およそ不釣り合いな装いだ。従業員が、モデルが意図的にダサくしていると理解したらしかった。

片や瞳と呼ばれた若者の恰好は、黒のハイネックセーターにスウェードの乗馬パンツ、黒革のロングブーツという出立ちで、おしゃれた男たちに、

ファッションのお手本として人気のある雑誌『メンズ・ノンノ』の世界そのものである。

「慣れないトコに出入りするんじゃないやねえよ。早く行け」

瞳が、手で追いつく仕草をしながら、立ち上がった途端、

「あつた……」

涼は、薄っぺらな財布をシートの間から見つけ出した。

「やっぱり、あつただろ、すいません」

ペコリと礼をすると、すぐに背を向けた。歩き出そうとする涼の後ろ襟を、掴まえると、

「ちょっと待った！ それはないだろ」

瞳が齒を剥き出した。

「とうとう？」

涼が、何事もなかったかのように、空とぼけてみせる。

「こいつ……」

瞳は、一瞬、両拳に力を込めたが、すぐに場所を

わきまえたのか、体の力を抜き、

「と、とにかく、ここで騒ぐわけには、いかないんだ。店の迷惑になることは、遊びのルールに反する。ちょっと外へ出ろよ」

一方的に言って歩き出した。二人の周りには、人垣が出来ていた。涼は、人垣に向かって肩をすくめてみせた。だが、反応はなかった。

「やっぱ、まっすぐ浜松に帰るべきだったかな」

独りごちて涼は、出口に向かって歩き出した。その後ろを野次馬たちが、好奇心に満ちた目を輝かせながら、無言でついて行った。スクウェアビルの裏通りに入るなり、瞳が振り返った。

「落とし前つけろよな」

涼の顎に、狙いすました一撃を見舞った。鈍い音を立てて、涼の体が後方に飛んだ。

「なんだよ、いきなり」

バランスを失って、よろけながら、涼は、額から滲み出る汗を拭いた。唇の端が切れて、血が流れ出していた。

「なんだよはねえだろ。大勢の前で恥かかせてよ。

俺は、六本木じゃッウで通ってんだよ」

瞳は、右拳を再び振るった。涼の頬が鳴った。と同時に、ネオンシャワーの下で、切れた唇から血がしぶいた。

「よせよ、暴力は……」

涼は、おぼつかない足取りでターンし、瞳に背を向けた。膝をガクガクと震わせながら、六本木通りに向かおうとしていた。

「こいつ逃げるなよ。十年早いんだよ、俺とサシでつき合うには」

「やめろってば」

という声を無視して、瞳は、その背を乱暴に突いた。

「逃げるなって言っただろうが」

涼は、アスファルトの上に顔からつんのめって行った。

「いてえ」

アスファルトの上に突っ伏したまま、涼が、手の

甲で顔を拭いた。頬に熱い痛みを感じたからだ。

「ゲッ。血！」

その手にベッタリと血糊がついていた。涼の顔が、一瞬青ざめたかと思うと、まっ赤になった。

「ちつきしょう。おとなしくしていれば……」

血に濡れた手を見つめ、激昂して叫んだ。

「もう、我慢できねえ」

「なんだよ。文句あるのか」

そのとき、ニタニタと笑っている瞳の足を、涼がいきなりすくった。不意を衝かれた瞳は、激しく転倒した。

「いてて……」

起き上がるより先に、涼が、喉をスニーカーの先で踏み潰した。

「ググ……やめろ」

くぐもった声を上げながら、瞳が、スニーカーに手をかけ、必死に抵抗を続けている。だが涼は、すつと膝を上げると、喉元めがけて、もう一度スニーカーで踏みつけた。

「グッ」

一転して攻手が交代し、涼が丈夫そうな歯を剥き出しながら、踏みつける足に力を込める。

「よ、よせ……」

涼は、さらに足に体重を乗せた。瞳の苦悶に歪んだ顔が、左右に幾度となく揺れる。

「だから、やめろって言ったろ。俺は、血に弱いんだよ」

涼の大きな目が、不気味な光を放っている。

「や、やめろ」

瞳の顔が紅潮し、やがて玉のような汗が噴き出して来た。

「こっちは院に戻りたくないから、おとなしくしてやってただけなんだ。空カッコつけんなよ」

涼が、唾を飛ばしながら言うと、いきなり瞳の顔を蹴った。

「グエ……」

瞳の臉が切れ、血が飛び散った。次の瞬間、瞳の長身が伸び切ったかと思うと、すぐに丸まって、ア

スファルトの上をころがった。

「ケンカってもんはなあ、こうするんだよ」

路上で呻いている瞳の顎を、サッカーボールのように、涼が蹴り上げた。瞳の丸めていた上体が、バネのように伸び切って、宙に浮いた。

「グ……」

その上体が、地面に落下する直前に、涼が、脇腹を蹴り上げた。ボロ布のようになった瞳の体が、再びアスファルトの上をころがった。

「だから、東京の人間って、やなんだよ。カッコばっかしつけやがって」

涼が、今にも崩れそうな瞳のポニーテールを掴もうとした時、

「坊主。その辺にしとけ。いい加減にしないと警察が来るぞ」

涼は、警察というところで、ギクッと動きを止め、声の方を見た。

路上駐車されていた白いベンツの前に、サングラスの男が、腕組みして立っていた。周囲の空気を凍

らすような妻みのある声だった。涼は、呆然と声の方を見つめていた。

「もう。気は済んだだろうが」

イタリアン・シルク・ファッションといい、話し方といい、一目で業界の人間と判る男だった。

「騒がしくなる前に、散れ」

男の口調には、有無を言わせない厳しさがあつた。「ぐずぐずするなっ」

涼は、一瞬たじろいたものの、すぐに後ずさりを始めた。

「早く行けっ」

涼は、向きを変えると、

「失礼しますっ」

いちもくさん
一目散に駆け出した。

「いてて……」

足音が遠ざかったのを確認して、瞳が、声を上げた。体を小さく丸めたまま、路上に蹲っていた。

「オーバーに痛がるな」

サンダラスの男は、クールに笑いながら、瞳の方

へ、大股で歩み寄った。

「しなくてもいいケンカをテメェから仕掛けると、こうなるってことよ。まあ、分相応に遊べってことだな」

ニタリと笑ってから、瞳の脇腹をクロコダイルの靴先で、軽く蹴り上げた。さきほど、蹴られた所だった。

「うっ……」

瞳の体が、大きく波打った。

「いてっ」

瞳は、路上に倒れたまま、無事なほうの右臉を開けて、ひどいですよと半べソ顔で訴えた。

「いつまで寝てんだ」

サンダラスの男は、冷ややかに見下ろしていた。

「ちょっと、ついて来い。話がある」

それだけ言うと、サンダラスの男は、いかり肩を揺さぶりながら、ベントの方へ歩いて行った。

「……？」

瞳は、のろのろと上半身を起こした。が、男の言

いうことが理解できぬように、その角張った背を眺めていた。

「嘘！」

大門瞳は、サングラスの男の話が終わると、すぐに言った。

「そ、そんなこと、なんで俺に……」

瞳は、何度も顎をガクガクさせながら、やっと言った。驚きのあまり、震えているのだ。

「バカだった。作り話聞かせるために、こんなトコへ、わざわざ連れて来たんじゃないぞ」

男は、隣りにすわっている女の腋に手を廻し、さかんに乳房を揉んでいた。さつき、瞳がデイスコでひっかけたお立ち台のギャルだった。

「そ、そりゃ、この『Pクラブ』は、来たくても来られない憧れのデイスコでしたから……」

瞳は、お立ち台ギャルと目を合わさないようにして、周りを眺めた。入会金千五百万円というだけあって、VIPルームは、目や手に触れるもの、す

べてが最高級品だった。飲んだこともない高級ブランドーや、現役モデルがパニー姿でもてなす最高のサービス……瞳は、卒倒しそうだった。滲み出た汗に、ポニーテールからはみ出した遅れ毛が、ベッタリとこびりついていていた。

「前々から、お前には目をつけて調査していたんだ。一八二センチという、その体に、現役東日大二年生というおつむときた。それに感受性が強いのもいい。脅したり、すかしたり、芝居がやりやすい。見ため目のよさも必要条件の一つだ。お前は、訓練次第で、一人前になる」

男は、女の太股を撫でつけた。腕には、ダイヤモンドを鑲めたゴールドのロレックスが。そして左手には、ごつい小指と薬指にダイヤモンドの指輪が輝いていた。時折、その手がミニスカートのの中を滑るように往き来する。

「あん……」

女は、人目も気にせず、大胆に膝を開いていった。だんだんと、その表情が、うつろになって来た。

瞳は、ゴクリと唾を呑み下してから、あわてて目を逸らせた。

「で、でも俺、東日大生なんですよ。卒業したら、一流企業にだって入れるかもしれないんですよ。なんで、その俺が、それを棒に振ってまで……」

「いいや。お前は、それじゃ満足できないはずだ。企業ロボットになって、死ぬほど働かされて……」

内心、そんな社会に疑問を持つてははずだ。お前という人間は、カッコいいことが好きなんだよ。人と違った、カッコいい身形、カッコいい生活、カッコいい彼女、……カッコいい人生をやりたいんだよ。だが、今のままじゃ、カッコよさに懂れる、ただの学生にすぎんさ。どんなに、あがいたって、いいカッコの真似事ができる時代も、すぐに終わる」

男は、自信たつぷりに、サングラスの奥から、瞳の顔色を窺った。

「そ、そりゃ、そうだけど……」

瞳は、上目遣いで、オズオズと言った。

「だけど、あの世界が、カッコいいとは、俺には思

えませんよ。やっぱり普通の社会です……」

サングラスの男が、右拳でテーブルをいきなり叩きつけた。反射的に、瞳は、上半身を後方に引いた。サングラス男が、薄気味悪い笑みを浮かべながら、顔をぐいと突き出した。

「そうか。じゃ何か。俺の彼女に手を出そうとした落とし前は、どうしてくれる。働いて返せねえなら、今、ここで落とし前をつけてもらおうか。ほれっ」

男は、テーブルの上にあったステーキナイフを瞳に向かって突きつけた。

「お、落とし前？　そ、そんな……」

瞳は、白眼を剥いたまま、しどろもどろで言った。

「じゃ、どうすんだよ。落とし前は、つけねえ、組にも入らねえ……。じゃ、お前の実家にでも行って、責任取ってもらおうか。たしか親父は、高校の教師だったな……」

「ええ。でもそれだけは……」

「それだけは、それだけはって、いったい、どうやって落とし前つけるんだよ」

男は、怒鳴るように言ってから、ナイフをさらに前に突き出した。高く整った瞳の鼻頭まで一センチの所で、ナイフの先が止まっている。

「あ、ああ……」

瞳は、全身を恐怖に震わせながら、ナイフの先を魅入られたように見つめていた。

男は、ニタリと笑ってから、怯える瞳の隣りにすり直し、やさしく肩を抱いた。

「とりあえず、一年。いや、三カ月でいいんだよ。大学をやめろとは、言っていないんだから」

瞳の神経をくすぐるような猫撫で声だった。

「お前は、俺とは、頭の構造も出来も違うんだから、計算できるだろ。この世界に足を突っ込めば、どんなにカッコよく生きられるかが。凄いと思わねえか。女にも金にも不自由しない華やかな世界をさ。鼻先のとんがった、その辺のエリートどもさえ、お前の前で、跪くんだ。なあ、カッコいいだ

ろ」

「そ、それは……」

瞳は、背筋を伸ばした。しかし全身の震えは、納まらなかった。

「お前なら、指一本詰める代わりに、組に入れてやるって言ってたんだ。しかも、その組は、あの全国No.2の亜細亜総連合。その急成長株の有栖川組だ。今に、お前の肩の動かし方一つで、六本木の連中が動くようになる。いいか、眉一つでだぞ」

男は、瞳の肩をさらに引き寄せた。

ビクッと大きく全身を震わせた瞳は、あわてて姿勢を正した。

「今、ここで小指をちょん切るか、それともアルマーニや、ヴェルサーチを着て、六本木を堂々と歩くか……どうする？」

男は、瞳の耳元で、囁くように言ってからテーブルの上に無造作に二十万円を置いた。九枚ごとに一万円札で挟んで十万円の束にしてある。

瞳は、背筋を伸ばしたまま、生唾を呑み込んだ。